

[P4] 北陸地方の水田地帯におけるサギ類の採餌行動について

大河原 恭祐[○] (金沢大学・自然システム・生物)
木村 一也 (金沢大学・地域連携研究センター)

温帯域の水田地帯は多くの水生動物や湿性植物の重要な生息場所となっている。そのため、水田は人工的環境でありながら、水生生物を中心とした種の多様性が維持できる環境として、その保全・保護活動に対する注目が集まっている。水田を生息場所とする生物種は相互に関係を持ち、特有の群集構造や生態系を構築していると考えられ、またその種構成や多様性の特徴は微環境に依存して地域や場所によって異なり、また農耕法や水田管理法などもそうした特徴を決定する大きな要因とされている。従って、水田を利用する生物群集の保護・保全にはそうした地理条件や管理法なども考慮する必要がある。湿地や湖沼を生息場所としている鳥種にとっても水田は重要な生息地であり、特にサギ科に属する種は淡水魚類や両生類、水生昆虫類などを餌とし、水田の生態系の高次捕食者にあたる。そのため、その採餌行動の特徴は水田環境の生態系をよく反映していると予測される。演者は2013～2014年に北陸地方の水田地帯でサギ数種の分布と採餌行動を観察し、水田の微環境、また農法の違いがそうしたサギ類の分布や採餌行動とどのように関連しているかについて調査を行った。石川県小松市から中能登町にかけての平野部の農耕地に4カ所の調査地を設定し、各地の水田部で定点センサス法によってサギ類の分布と密度を調べた。その結果、サギ科は6種が観察され、各地ともダイサギとアオサギが優占種であった。またチュウサギも2地点のみで高頻度で観察された。そこでダイサギとアオサギを対象にその採餌行動を種間で比較したところ、採餌頻度や採餌効率は種間で大きな差はみられなかったが、ダイサギは他種よりも多くの種類の水生動物を餌としており、餌内容は他種よりも多様であった。しかし、調査地間では各種の採餌効率に違いがみられ、金沢市の水田ではそれは高かった。また調査地内では、圃場単位でも採餌効率に違いがみられる傾向にあり、水田面積などの微環境や農法などとの関係についても解析を行った。しかし、農法との直接的関連はまだ不明瞭であり、さらに詳細な観察が必要であると考えられる。